

二十二世紀論序説

——二十二世紀の文明と都市

田村 明

Tamura Akira

地域政策プランナー

はじめに

私は十年ほど前、皆が二十一世紀論を始めた頃、二十一世紀を論ずるよりは、人類文明の曲がり角にきた現在、論ずべきは二十二世紀ではないかといっていた。私なりの二十二世紀論の一端をある人に話したところ、《まだ早すぎる。もう少し取っておいたほうがよい》と窘められた。私自身も確かめておくべきことも多く、暫くは取り止めた。

二十二世紀を問題にしようと思ったのは、未来を語るときに、単純に現在の延長としては語れないのではないかとという疑問が起きたからである。かつてH・G・ウエルズが未来を語ったときに、その夢のような話は、科学技術の発展により次々に実現していった。それは予測を上回る早さであった。累乗的に上がつてゆく右肩上がりの時代だったのだ。だが、そんな単純な現在の延長で進むとは思われなくなった。それよりも二十一世紀中には、大きな文明の断絶の危機がありそうだ。それをどう乗り越えられるかのほうが大問題だ。二十二世紀はその後に来る世界である。

私は二〇〇五年に、NPO法人「日本の未来をつくる会」を友人たちと設立した。すでに東京、岡山、

札幌で地元の知事も交えたシンポジウムを行っている。これは三百年ぐらいを見通した日本の未来のグラ
ンドデザインを行おうというものだが、この会では文明の断絶を想定はしていない。私個人としては、こ
の会とは別に、文明の断絶とその先のことも考えておく必要があると思っっている。だが、まだ機が熟して
いないので、ここでその全貌を述べることはできない。

そこで、ここでは、二十世紀後半の戦後から今日までを概観し、二十二世紀論の前提になる課題を瞥見
する序説段階に止めておく。

1 戦後の三十年——日本都市問題会議成立まで

日本都市問題会議が生まれたのは一九七八年から、今から三十年前になる。現在は敗戦から六十年以
上を経過しているので、三十年前とは、敗戦から現在までのほぼ折り返しの時点に、この会が始まったと
いうことだ。

敗戦後からの三十年間は、まさに激動の時代だった。一口でいえば縄文時代から近代都市までを一挙に
駆け抜けた三十年だった。

敗戦によって日本の主な都市は、いったんゼロに近い状態に返った。あの東京の都心や下町一帯の焼け
野が原を今でも鮮明に覚えている。その焼け跡に、ありあわせの焼けトタンなどで囲ったバラックがそこ
ここに建つ索漠たる風景だった。そのうえ、食料がなかった。配給は遅配や減配。やっと来るのは、家畜
の飼料に使うようなバサバサの玉蜀黍の粉。ヤミ市ができたが、金やモノのある人はいい。そこで買うた

めの金かモノがなければ、指を唾えて見ただけだ。日本人は五百万とも一千万とも餓死するだろうと
いわれた。東京に住んでいた私たちは、そこここに生えている野の草の食べられるものは食べた。まるで
縄文時代のような採取時代にまで逆戻りしてしまったのだ。

文明の断絶をじかに味わってしまったのだが、それでもこの時代の断絶は、敗戦国という日本だけの問
題だった。その対極にある戦勝国アメリカの物質文明の豊かさを同時にいやというほど見せつけられた。
しかし、二十二世紀までにあるかもしれない文明の断絶は、一国だけの問題ではなく、地球的な規模に広
がってしまう恐れがある。

戦後の我々は、とにかくゼロからスタートした。細々と復興に喘いでいるときに、突然朝鮮戦争が起こ
り、その特需の波に乗って戦後復興を果たした。「もはや戦後ではない」という時代を抜け、ついに戦前
には予測もつかない自動車時代や超高層ビルの建設ラッシュという今まで経験したことのない「都市の時
代」までの道筋を一挙に駆け抜けた。それはかなり異常な体験だった。私は戦前のことも記憶にあったか
ら、断絶状態に陥ったこともよく見ている。またその後の展開までのすべての過程を体験してきた。

その三十年間は断絶を乗り越え、高度成長の恩恵を受け復興から未来への展開を行う一方、反動として
一通りの都市問題も体験した。なかでも、公害、モーターゼーション、スプロールと乱開発、ごみ処理問
題などは典型的なもので、その対応に悩まされてきた。

一九七二年にストックホルムで行われた国連の人間環境会議では、世界の国々が共通の問題として環境
問題に取り組むべきことが確認された。この会議では、環境問題として戦争や飢餓、貧困も取り上げられ
ている。その頃の我々にとって、これらを含めて環境として考えるのには、少し違和感があったのだが、

それは日本が恵まれていたからだろう。だが、世界的にみれば、戦争や貧困は、生存にかかわる基本的な環境問題であったのだし、日本だって戦中戦後にそういう体験をしてきたところだったのだ。

一九七〇年代になって、都市問題を解明するために、本格的な「都市政策講座全十三巻」が岩波書店から刊行された。この編集には私も参加して二冊を担当し、三冊に論文を載せた。これは始めは「都市問題講座」という案だったものを、もう「問題」の時代ではなく、それをどう解決するか「政策」の時代だという認識が高まり、「都市政策講座」という名称として刊行された。

2 日本都市問題会議の創立からの三十年間とその後

日本都市問題会議は、そうした戦後三十年の後に結成された。我々の名称は都市問題といっているが、問題提起に止まらず、それをどのように解決していくかが大きな課題だということでは、共通の認識を持つていた。

しかし、対象がはつきりしている問題よりも、都市の矛盾、文明の矛盾として起きてくる問題のほうが深刻になってくる。たとえばクルマ社会にみるように、車を持つということは大衆の夢が実現し多くの人々が幸福を味わい、全国の流通を促進し飛躍的に便利にさせたが、同時に排気ガス、騒音、事故など様々な問題を引き起こしている。さらには都市構造を変え、犯罪の形態を変え、人々の意識まで変えた。個人の幸福を追求することが、同時に企業の利益、社会の発展へと繋がっているうちは良かったのだが、その欲望と利益追求が、社会に様々な波紋を引き起こす。現代の情報社会もよく似ている。利点と問題点が共存し交錯しているので、一概に良い悪いは言えない。被害者に見えているものが、実は原因になる加害者に

なりかねない。こうした矛盾を内包したシステムから逃れることはできなくなっている。

日本都市問題会議結成の一九七八年は、神奈川県長洲一二知事が「地方の時代」を提唱した年でもある。中央の施策に任せるのではなく、それぞれの地域が、地域の実情に合わせて自信を持って政策を立て経営を行わなければならないという理念は、全国に浸透していった。

ちょうどその頃、国でも、大平正芳首相が「田園都市国家構想」というものを打ち出した。首相は道半ばで倒れたので、その詳細は明らかにされないままだったが、理念としては、国から打ち出された「地方の時代」と考えてもよいのではないか。それまでの単純な高度成長路線の反省をこめて、ようやく自治体からも国からも、「地方」や「質」の問題が大きく取り上げられようとしていた。

その後、いわゆるバブルの時代といわれる不毛な時代が到来し、地価は急上昇から暴落して土地神話は崩れ、不良債権が続出して経済は混乱した。まだバブルの後遺症に悩んでいる一九九三年になって、地方分権に関する国会決議が行われ、九五年には「地方分権推進法」が成立した。これにより、従来の機関委任事務が廃止され、国と自治体との関係は「上下主従」ではなく「対等協力」の関係であるという、自治体本来の姿として確認された。また二〇〇〇年には「地方分権一括法」が施行されることになった。

財政問題などの積み残しの問題は大きいとはいうものの、確実に地方分権の方向へ動いてきたといえる。それは、紆余曲折はあっても今後とも進んでゆくだろう。都市のような複雑なものを、成熟した国で一元的、画一的にコントロールすることには無理があるし、無駄も多い。成熟国家日本では、列島を地ならしして画一化することではなく、地域ごとに個性ある展開を図ってゆくことである。そうでなければ、誇りを持って各自がそれぞれの地域で暮らしてゆくことはできない。

地域分権を進めれば、自治体を地域市民の信託を受けた《市民の政府》にしてゆく必要があるだろう。地方分権を国と自治体との権限の取り合いのような問題に終わらせてはならない。自治体とは、主権者である市民が、まず身近な範囲でまとまってつくった《政府》であるという認識が必要である。とくに、基礎自治体を自分たちの政府としてしっかり認識し機能させることである。

一方では、国の範囲を越えた国際化が進んだ。環境問題には国境を越えて協力し合うことの必要性が確認された。

また、この会が始まった三十年前には、東西の冷戦が解消するとの願いはあっても、現実になるとは夢にも思っていなかったが、劇的に実現した。しかし、それで問題がなくなっただけではなく、イスラエルとアラブ世界との緊張、国際テロ・核拡散など、新たな問題が次々と起き、問題はかえって深刻化、複雑化している。

一九八五年になると、ヨーロッパではEUが十五か国で始まり、しだいに拡大している。ヨーロッパ諸国では国境など感じられなくなったし、特定の国以外は通貨さえユーロに統合されてきた。これも三十年前には考えられないことだった。さらに、東欧からイスラム文化の異なる国までもがEUへの統合への道を目指している。

そのEU統合がスタートした一九八五年には、同時に《ヨーロッパ自治体憲章》が制定され、とくに基礎自治体の役割を確認したことを忘れてはならない。つまり、国際化が進み、従来の国家の役割が相対的に小さくなって国際社会に移行する一方、自治体の役割も同時に欠かせないものになってきた。市民がいきなり国際的な課題を扱う政府だけを頼りにすることはできない。国際化すればするほど、他方では市民に身近な政府である自治体が機能しないと、市民は日常生活ではもちろん、非常時には裸で放り出されて

しまうことになるだろう。

現在の国民国家が形成されたのは、せいぜいこの百五十年とか二百年余りのことである。今やその役割は、国際社会と市民の政府の両極に相対的にウエイトを移してゆくようになる。そのための中間的な装置として先進国では連邦制をとっている。国よりも身近な立場にいる州が基礎自治体をサポートする必要があるだろう。日本の道州制論は、府県合併のようなニュアンスが強いが、それでは意味がない。中央集権の国家を、より市民に身近な単位にするために分けることであるし、基礎自治体をサポートするためのものである。自治体としての州制への移行が望まれるだろう。

とくに、美しい国をつくらうというなら、いきなり中央からの指令で画一的に行うことは無理だ。それぞれの地域が自分たちの個性に目覚め、それを愛し育ててゆこうとしない限り、美しい国もできない、維持されない。たんなる権限の分権ではなく、地域が主体性を持ち、政策に責任を持つ時代が期待される。

3 二十二世紀への課題

時代は常に流れる。二十世紀に入ったばかりだが、そのまま時間がたてば、漠然とした連続性の中で二十世紀を迎えるということにはなりそうもない。

古典的な都市問題ともいべき公害に代表される環境問題の解決には、二十世紀中かなりの進展があったのだが、生活を脅かす様々な問題は、より複雑化し、より深刻化している。それは単純に相手があつて対策を立てればよいというよりも、利点と同時に問題を引き起こし、複雑に絡み合う矛盾として示され

ることが多くなった。

今我々の抱えている課題はあまりにも多いし、文明の矛盾と綻びが目立つようになってきた。それらの問題を次に列挙しておきたい。大きく、地球次元にかかわる問題と、比較的身近な地域の問題との二つに大別できる。しかし両者は実は様々な形で絡み合っており、明確に二分することはできない。ここでは一応便宜的に二分しておくことにする。

地球次元にかかわる課題

- ① 大量破壊手段の取得と行使……核爆弾、大陸間ミサイル、生物化学兵器
- ② 戦争と内戦……国際間の紛争、人種間の軋轢、経済的・文化的対立
- ③ テロ……個人攻撃、集団攻撃、無差別攻撃、大量破壊手段の使用
- ④ 難民流出……内戦、差別、虐待、報復
- ⑤ 人口爆発……地球百億人口、地球の容量
- ⑥ 貧困と飢餓……富の偏在、食糧の偏在、食糧難、大飢饉
- ⑦ 自然災害……地震、火山爆発、台風、津波、竜巻
- ⑧ 地球温暖化……CO₂ガスの増加、氷床・氷河の融解、海面水位の上昇
- ⑨ オゾン層の破壊……フロンガス、皮膚癌
- ⑩ 酸性雨……森林破壊、湖沼汚染
- ⑪ 砂漠化……気候変動、雨量の偏在化、乾燥化、黄沙
- ⑫ 森林破壊……木材資源の浪費、酸素補給量の減少、生物多様性の減少、価格の高騰

- ⑬ 埋蔵資源の枯渇……エネルギーの過剰利用と危機、資源争奪戦
- ⑭ 水資源の枯渇……地表水の囲いこみ(ダムなど)、地下水の枯渇、アラル海の縮小
- ⑮ ウイルス・感染症……インフルエンザ、エイズ、出血熱

これらの問題は、すべて人間の今までの活動の結果として生じたものである。それらのなかには、人間生活により多くの便益を与えるはずだったものが、逆に反動として害を与えるものも多い。地球温暖化や砂漠化、森林破壊、資源の枯渇などは、人間生活を便利にするために生じた問題だ。

自然災害という天災は人類が存在する以前からあるのだが、それが人類の築き上げてきた蓄積に重大な被害を及ぼすので「害」になり「災害」と呼ばれる。さらに人為的な「人災」が加わり、被害をいっそう大きくする。人類がいなければ、災は「害」にはならない。

現在の人類は、欲求がとめどなく拡大してゆく生物である。グローバル化によって、欲望は局地的なものに止まらず、地球次元にまで広がった。人間の様々な欲求が、新しい発明や発見を生み、今まで利用されなかったもので開発し、人間に便利さと快適さを与えたことは確かだが、それは幸福ばかりではなく、逆のマイナスを伴うという矛盾を包含し、思わぬところに問題となって現われている。

さらに戦争のように、人類の存在そのものを否定するような事態さえも招いている。この戦争や内戦を「文明の衝突」ととらえるハンチントン¹⁾は単純すぎる。たとえば、イスラムとユダヤ教を単純な衝突とみるのは誤りで、中世のサラセン帝国内では、アラブ人も、ユダヤ人も、キリスト教徒も、一つの都市の中で平和に共存していたし、その期間も長い。その共存の知恵を放棄して、欲望の衝突に切り替え、しかもそれを利用したり煽ったりする近代文明のシクミに問題があった。

文明的次元でみれば、それまでの戦争とは全く異なるものになった。それまでの戦争が局地的で、原則的に戦闘要員同士によるものに限られていたのが、第一次大戦のときに、一般市民を巻き込むものに質的に変化した。さらに第二次大戦で、核爆弾を持った今、戦争は文明の危機であり、断絶につながりかねないものになった。

日本の戦後の救いは、外国との戦争はもちろん、国内で互いに殺しあうような内戦がなかったことである。徹底的な武装解除がなされ、銃はおろか日本刀も取り上げられた。世界ではアフリカのルワンダのように、八十万人と人口の割以上が内戦の殺し合いで死んだという事実があちこちで起きていたが、日本では心理的にも物理的にも、そういう可能性はなくなっていた。

また、今でも世界中に難民は沢山いるのに、日本には難民となつて他国に流出するなどということは考えられないし、難民が大挙来訪することもなかった。そのような、平和の国日本を実現させ、維持できたことは、世界に対しても大きな誇るべき点であろう。

地域次元のかかわる課題

- ① 大気汚染・水質汚染・騒音・悪臭・土壌汚染……古典的公害
- ② 地盤沈下・陥没……地下資源の採取（石材、石炭など）
- ③ 乱開発……土地所有権の乱用、大型土木機械の利用、全体計画と規制の不備
- ④ 景観の混乱……景観意識の欠如、土地利用・空間利用の無秩序
- ⑤ コミュニティ崩壊……地縁社会の希薄化、遠距離通勤、相隣トラブル
- ⑥ 高齢化……階層別人口のアンバランス、社会的役割の喪失

- ⑦ 少子化……高学歴、子育て環境の脆弱、欲望の多様化、生物機能の低下
- ⑧ 医療・介護要員の不足……若年層の不足、報酬システム
- ⑨ 家庭崩壊……核家族化、生活時間のズレ、共同目的の喪失
- ⑩ 青少年問題……引きこもり、犯罪の年少化、人生目標の喪失、
- ⑪ 麻薬、ドラッグ……ヘロイン、コカイン、LSD、不安、情報過多
- ⑫ 環境ホルモン……内分泌かく乱物質、DDT、PCB
- ⑬ ストレス……うつ病、自殺、社会的救済の脆弱性
- ⑭ 凶悪犯罪・不条理犯罪……強盗殺人、家庭内殺人、幼児殺害
- ⑮ モータリゼーション……飲酒運転、マナー悪化、高速化、混雑渋滞、排気ガス、事故多発
- ⑯ 廃棄物処理……産業廃棄物、最終処分地、リサイクル社会の未熟
- ⑰ 放射能汚染……放射能漏れ、放射能汚染、放射能は器物の処理
- ⑱ 情報操作、情報犯罪……ウイルス、不正アクセス、サイバー犯罪
- ⑲ 被災脆弱性……インフラの複雑化、高層化
- ⑳ バーチャル社会……ブラックボックス化（耐震偽装、都市装置の非可視化）、匿名性の拡大

これらの問題も、基本的には人間の欲望を自由に実現してゆく結果、その充足とともに反動として生ずる問題であり、現在の人類文明の矛盾である。自由を制限する封建的抑制を打破することによって、近代社会は発展してきたのだが、自由を享受する利益が一方的に強者だけに偏らないためには、市場原理だけに委ねずに新しい社会的秩序が必要になる。それが十分に整備されていないと、自由によってかえって矛

盾は拡大するばかりである。そこで地域社会における自治体が市民政府として働き、国はそれをサポートする体制が必要になるだろう。

しかし、人間同士の関係や家庭の問題になると、国はもちろん、自治体などでも、法で縛る問題ではない。そこで成熟した社会としては、それに相応しい慣習やルールを構築する必要がある。それは家庭と学校教育と地域社会とによって実現されるものである。

4 一二二世紀への対応

ここでこれらの問題について、いちいち詳細に述べるゆとりはない。それらは改めて語らなければならない。いずれにしても、これらの問題について大方の答えを出して実行してゆかなければ、二十二世紀は開けない。

可能性としては大きく三つに分かれる。第一の可能性は、その答えを全く誤ってしまったって答えを出せない場合である。このときは、人類は絶滅の危機に瀕する。

第二の可能性は、その答えに失敗はするのだが、なんとか絶滅を免れた人類が生き延びてゆく場合である。この場合は、現在とはかなり違った文明を再建することになる。

第三の可能性は、これらに、おおむね適切な答えを見出し実行していった場合である。人類文明は継続するが、それには現在のような文明をそのまま延長するのではなく、相当に違った文明として再編成することになるだろう。最も軽度な断絶でおさめる場合である。

そのどれになるか、まだ結論を出すわけにはゆかない。結論は今後の人間の行動にかかわるからである。

ここでは概括的に、次の幾つかの点を指摘しておくに留めたい。だが、これらの点は、三つの可能性の場合になっても、問題にしななければならない点である。

しかし、いずれにせよ、現代の価値観と行動様式をそのまま延長してゆくということはありえないだろう。

核戦争について

最大の問題は、人類が地球の全員を何度も殺せるほどの大量破壊兵器を手に入れたことである。手に入れてしまった以上、それを完全に放棄しない以上、どこかで意識的に利用されるか、あるいは予想されない暴発をするかもしれない。幾つかの大国だけは核を保有し、他の国には持たせないという現在の核拡散防止態勢は、原理的に無理がある。核がある以上は、それが何時何処で使用されてもおかしくないということだ。

第二次大戦以降、人類は自分自身の手で、自分たちがつくり上げた文明すべてを、一瞬にして破壊し尽くせるほどの大量破壊兵器を開発、保有してしまった。人類最大の危機を拡大させながら、その危うさの上に都市をはじめ膨大な現代文明を築いてきた。その矛盾する姿を視覚的に提示して見せたのが、二〇〇一年九月十一日のニューヨーク産業貿易センタービル、テロによる航空機激突による崩壊であった。核の使用が行われなくても、まさに現代文明の最高のシンボルが、一瞬にして崩壊してしまう姿を多くの人々が目の当たりにした。

だが、現実はこのままのものではない。この事件は、それよりはるかに危うい状態の上に、現代文明が存在していることを如実に示したものだ。核爆弾が使われれば、あの何層倍化の悲劇、いや地球上の人類

が絶滅するという危機までが、一瞬にして起りうるという予告編を見たような気がする。大量破壊兵器の使用は、特定の人々の手に握られているが、それらの人々が、常に冷静に行動するとは限らない。また、これらが地上に存在する以上、小型化され、多数のテロリスト——しかも自爆テロリスト——の手に渡り拡散してゆく危険がないとは言えない。これを克服するのは核兵器の完全廃絶のほかはないが、それできるかどうかは、まさに人類の英知に関わっている。

環境の限界と安定化

二十世紀文明は、人間の欲望をすべて肯定する上に成り立ってきた。それが文明を大きく進展させたが、自然の飽くなき改変を許し、資源やエネルギーへの無限の欲求になって現われた。大量生産、大量消費を肯定する社会経済状態をつくり、都市はその頂点として実現し巨大化していった。大量消費の結果は大量廃棄につながりその処理も限界に達しつつある。文明が無限に進展した例はない。必ず限界を迎えるのは宿命である。その宿命を遅らせ、限界のなかでも人類を幸せにするにはどうしたらよいかを考え、努力してゆくのが、人類文明を継続させるカギである。

人類は環境を改変することで現在の姿を得てきた。これを元に戻して、他の生物と同じように、自然のままに暮らしてゆくということは不可能である。「自然に返れ」という声も時々上がったが、それは本当に自然に返るのではなく、忘れていた自然に思いを致すということに止まるであろう。建設を行えば、必ず何かを破壊し、何かを喪失する。喪失されたものは量や金銭では測れないものも多いので、軽視されがちであったが、そのツケが膨大になってきた。そこで、自然に目をむけ、循環型、ゼロエミッションのシステムが求められることになる。

現代の科学技術を活かして、自然に大きな負荷を与えないようにすることは、ある程度可能であろう。地球に降り注ぐ太陽エネルギーを有効に利用して、エネルギーも素材もバイオマスに頼ることを目指して行くべきだろう。木で作った家、泥で作った家は自然の素材から作り、用がすめば自然に返っていった。雑木から得たエネルギーは自然との間に太陽の力を借りて循環していた。

地球は太陽の衛星だから、その恩恵を受ける限度で暮らせばよい。現在は菜の花油などやバイオマスエタノールが燃料として有効だ。将来は太陽発電で水素をつくり、燃料電池をエネルギーとする範囲内で生活すれば、原理的には地下資源に頼らなくてもすむ。

現在ではコストが問題になるが、短期的な収支計算による行動をやめて、地球環境からみた長期的で総合的な計算に立って、必要なコストを適切に負担しあう社会経済システムを構築することが重要だ。現在の欲望を満足させるだけで成立するシステムを続けられれば、どの場合にも破局が到来する。それをどのように持続可能なシステムに切り替えるかが課題である。

個人欲望の制御について

個人の欲望を必要以上に煽り立てて需要を喚起することが正しいとされてきた社会システムにも、一定の自動制御が働くように構築しなおされなければならない。しかし、それが極端な管理社会になり、人間の自由度を奪ってしまうなら問題だ。政府の政策を頼りにするのではなく、人間自身の自発的な制御が必要になってくる。これは政策の次元を超えた、人間そのもののあり方の次元である。

二十世紀末から二十一世紀へかけて、個人としての人間の欲望が解放されてきた。個人が尊重され、その希望の実現へ向けての行動が肯定されてきたことは、近代の成果である。だが、人間は一人では生きら

れない生物であり、個人は他の個人、社会との関係で生きていることはいつの時代でも変わらない。その調和を、権力や法令の強圧によって求めるのではなく、人間の内発的な倫理性のなかで求められるべきだろう。

これまで人間の欲望を制御してきたのは宗教の力であった。人間の欲望を物質世界から精神世界へと転化させることが行われた。極端な場合は、無に通ずる、悟りの世界だった。欲望に渦巻く人々も、そのような悟りの世界を理想の世界として認めていた。

ジャイナ教の教祖マハーヴィーラは一切の煩惱を断ち切り、一糸まとわぬ裸の姿で説法して歩いた。だが、この現在まで二千五百年も続いている宗教の信者は、意外なことに金持ちが多い。欲望の抑制は逆に、商売に熱心のようなのだ。

マックス・ウェーバーによれば、プロテスタントの禁欲的で勤勉な働きこそが、近代の資本主義を成立させた要因であるとする。個人の利益だけではなく、社会への奉仕の精神が初期の健全な資本主義を発展させた。資本主義は決して無制限な欲望の結果として実現されたものではなかったが、あるときから変化した。

日本の資本主義興隆の立役者、渋沢英一も決して個人の欲望の充足を優先させてはいなかった。資本主義のリーダーたちには強い社会的な倫理性を求めた。

イスラム社会では、金利の存在を認めなかったし、文化と科学を重んじた。ギリシャのアリストテレスをはじめとする科学者等を尊重し、アラブ世界のなかで独自の展開をみせた。とくに数学、医学は優れていた。それが西欧に伝えられ、ルネサンス文化を生みだす原動力になった。人間の欲望は金銭よりも哲学、医学、数学に向けられたし、それが今日の西欧の基礎になった。これらの学問に向けられたエネルギーは、

環境に負荷をかけるものではなく、衝突を生むものでもない。人間の隠れた能力を引き出し、刺激を与えてきた。

成熟社会では、資源の浪費や、個人的満足だけを求めるのではない社会的な価値を、個人の自覚として持つべきである。これは近代的な自由を獲得した個人の責任として自覚すべきだし、それが成熟した社会といえるものだろう。そういう倫理観が自然のうちに浸透している社会が求められる。

市場原理の限界と人間の満足と幸福について

個人としての人間が、何によって幸福を得るのが大きな課題だ。心理学者のマズローは、人間の欲望を生理的欲求、安全の欲求、親和の欲求、自我の欲求、自己実現の欲求の五段階とした。この欲求を満足させることにより幸福を得る。親和の欲求とは、他人と関わりたい、社会に帰属したいという社会性の欲求、自我の欲求とは社会のなかで価値ある存在として認められ尊敬されたいという欲求だという。こうみても金銭的欲求は人間としてはかなり次元の低い欲求だが、なぜか現代ではそれが最高の欲求になってしまったのだろう。社会が病に侵されたとしか言いようがない。

市場原理への無制限な信頼が、その大きな要因になっている。そこに不公平な価格形成を行うルール違反は問題外だが、仮に手続的に公正でも、そこで形成された価格が万能であるとは市場経済至上主義のフィクションだ。市場は目に見えない次元を含め、グローバル化しており、市場の原理が「見えざる神の手」で動くという範囲をあまりにも越えて大きくなりすぎてしまったからだ。それが欲望を増幅させる。

しかし、私はマズローに加えて、六段階目に他者実現を加えたい。人間の自己実現は、特殊な芸術家は

別として、何らかの他者や社会へ働きかけることによって、他者が喜び生き生きとする姿を見るときではないだろうか。自分が他人のために役立つと思うときが、いちばん生きる喜びを感じるべきである。それは自己実現を超えた他者実現ともいべきものであり、それによって初めて人間が人間らしい生きている実感を持てる。この六段階目の欲求の他者実現に至らなければ、自我の欲求も、自己実現の欲求も達成されないだろう。

戦後の日本では人間の欲求を極めて低い次元に留め、欲求は金銭に集約され、換算されてきた。青少年や子どもたちにまでその風潮が浸透していると、社会全体へは無関心になり、独善的になった。量的にはかれる欲望は、あまりにも単純化されていて、無限の増殖するばかりで、どんなに多くのものを得ても、これで完全に満足するという数値は得られない。常に他と比較して不満のほう募ってしまう。最終的な満足も得られないだろう。

二十二世紀の悦びについて——創造の世界

無制限な金銭表示できる欲求を抑制するということは、人間を禁欲的で退嬰的なものにするのではなく、他者実現ということでも十分な生きる悦びを実感できるだろう。教師とか医者、介護士、看護師などは他者への奉仕が目的の職業だから当然だが、他の職業にしても、基本的には他者に奉仕することで自分も利益を得るという構造のほずである。そこに悦びと誇りを感じる社会をつくりあげてゆくべきだろう。

また、個人としても様々な創作活動を行うことで悦びを得ることができ。文芸、造形、音楽などは、プロにはならなくても、日常生活を十分に豊かに充実させ楽しませるものである。広い意味の芸術的な行為は、特別な報酬がなくても、生きる力を与える無償の行為である。

我々が未開といって軽蔑していた世界には、こうした優れた芸術的世界が展開されている。アフリカのドゴン族の仮面などは、ピカソの芸術を上回るものだ。経済的な価値でみればピカソの絵は一枚何億円とするが、こちらは価格としては問題にならないが、価値は価格だけで量ることはできない。

人間の心には、いたるところにこうした創造的な精神が眠っている。経済価値だけに重きをおく現代は、多様な価値をあまりにも単純化した。様々な価値を認めれば、自分も楽しみ、他人も楽しませるものになるだろう。

創造的とは創作活動に限らない。様々な歴史探求や郷土史の研究なども創作的な行為だ。刊行や旅行も、写真やスケッチなどを加えた旅行記などを綴ることでもそれに近い悦びを得るだろう。

何もできないという人は、鑑賞のほうに回ればよい。創造的世界を鑑賞できるのも、人間の美しさを愛する心を育て、品位を高めて生活を豊かな充実したものにするだろう。

また、学ぶということも、人間を活性化させ生きる力を与える。学問は無限であり、とくに他人や自然に害を加えることもない。それどころか、自然と共存してゆく知恵をうることにもなるだろう。人間の脳の力は一生の間にせいぜい一割くらいしか使っていない。もっともっと脳を活性化させることは悦びを伴うものである。

身体的能力について

人間も一個の生物として、身体的能力がモノをいいそうだ。近代文明は、その人間の身体的能力を補うために様々な文明の利器を発達させた。しかし、人類に文明の断絶が起きるときに、人間は再びその肉体的能力に頼るほかなくなるかもしれない。もちろん、断絶があったとしても、人間の獲得している様々な

知恵を活かすことはできる。その知恵を活かすにも身体的能力がものを言うだろう。

スポーツも自分の健康のためであるが、イザというときの体力のためにも必要になるだろう。また人とのふれあいの機会を提供する。一流のスポーツ選手が多額の金を得るのを見て、それを夢だという言い方で、子どもたちを金の亡者にさせてしまつてはならない。

スポーツとは、優れた人々にとっては純粋に人間の能力の限界を試してみることであるのだが、そうした特殊な能力よりも、人間全体の生物としての能力を維持し向上させ、非常の事態にも役立つようにしておくことが必要だ。そうでなければ、人間の能力は文明の発達とともに退化してゆくばかりになる。

身体能力の開発も一種の創造的行為であるかもしれない。モンゴルの少年たちは、広い草原で馬を駆り、生きる知恵と身体的能力を身に付ける。朝青竜が強いのも、子どもからの身体的な訓練による。それはどんな状態がきても生き抜く基礎条件になる。

人と人とのつながりについて

人間は多くの人の間であつて、その交流とつながりを持ってこそ人間である。都市の発生は人々の交流の場であるイチからであつた。敗戦直後でも真つ先にできたのは、闇市だつた。それに、池袋駅前の焼け跡の広場には、青空の将棋会所ができた。一局五円だつたが、大勢の人々が集まつて僅かな時間を楽しんだ。この時代には、まだ何の娯楽もないし、テレビもないが、人の交流とせめてもの憩いを求めたのだろう。また、地域のサークル活動も盛んだつた。読書会やら話し合い、コーラスなどの地域活動があつた。電車賃をかけて遠くに行くよりも、まず近くで今まで知らなかったもの同士が互いに交流を求めた。これからどうなるかという不安と期待もあつた時代だつた。

ところが戦後、交通・通信手段が飛躍的に発展し、かえつて基本的な会話による人間のコミュニケーション能力を下げたところがある。パソコン、ケイタイと通信手段にはこと欠かないし、その利用は盛んなのだが、対面による会話能力はかえつて落ちていくし、地域の人のつながりも、家族間の会話を減らしてしまつたという。

匿名性が許されるのは、社会的正義や人間の尊厳の維持のために、どうしても他の手段に頼れない緊急避難の場合に限られるだろう。一方ではミクシィに代表されるようなSNS（ソーシャルネットワークサービス）といわれるような、特定のコミュニティをインターネットでつくるといふことも行われるようになった。ここでは匿名性よりも、実名性を尊重している。不特定多数とのコミュニケーションは意外な面白さはあるが、トラブルも起きやすいし、かえつて人間関係を希薄にしてしまう面もある。その是正がはかられているのだろう。だが、表情・仕草などを含む総合的なコミュニケーションとしては、フェイスブックフェイスにまさるものはない。

都市とはそのような出会いとコミュニケーションをつくり出す場であるのが、その本質であつた。将来とも、都市は多くの異なる人々が集まる出会いの場だといふ本質はなくなる。どのように自由に異なる人々の自由な出会いと交流が可能にさせるかが都市の課題だ。むしろ通信手段の発達した今日は、かえつて人の繋がりを希薄化させている。直接の出会いの場としての都市こそ、その必要性が求められる。

家庭もコミュニティも、意思疎通から始まる。そこに出会いの驚きや悲しみや、喜びがある。肥大化した巨大都市では、人間関係もバーチャル化してきた。もつとフェイスブックフェイスの出会いの場をつくつてゆくのが課題である。

おわりに

これははじめに述べたように、まだ二十世紀論の序の口である。だが、現在はそうのんびりした時代ではない。文明の断絶の危機が迫っている。これをどう乗り越えてゆくかが大きな課題だ。それには異なる人々が自由に出会い、様々な交流のなかに悦びを満たしてゆけることが必要だ。都市という異なる人々を繋げる、人間の発明したシステムと装置の利点を世界の規模で最大限に活かしてゆくべきである。互いの違いを認めあい、そこに新たな発見と喜びを感じあうべきだろう。世界の平和はそこにこそ構築されるし、そのなかで大量破壊兵器を永久に封印する時代がくることを望みたい。

図表 地方シンポジウム

地方シンポジウム	開催年月日
掛川シンポジウム	79. 7.21・22
神戸集会	80.11. 1・ 2
大阪集会	82. 2.20・21
酒田集会	83.10. 8・ 9
津軽集会（於弘前）	84. 5.12・13
東西合同会議（於大阪）	84. 9. 8
盛岡集会	85. 5.11・12
川口集会・東西合同会議	85.11. 9
松江集会	86. 6.14・15
東西合同会議（於大阪）	86. 9.13
東京湾シンポジウム（於横浜）	87. 6.27・28
高岡集会	88. 9.15・16
東西合同会議（於京都）	88. 9.17
水俣集会	89.10.28・29
掛川集会	89.12.16・17
宇和島集会	91. 5.11・12
恵庭集会	92. 5.30・31
ウォーターフロント・シンポジウム（東西合同：於東京）	93. 6.12
首都機能移転と地方分権（東西合同：於京都）	93.10.16
飯田集会	94. 5.21・22
鎌倉集会（新年特別例会）	95. 1.28
三春集会	95. 5.27・28
瀬戸集会	96. 5.25・26
沼津集会	97. 5.24・25
東西合同会議（於大阪）	97.10.18
大館シンポジウム	98. 5.23・24
掛川集会	99. 7.24・25
東西合同会議（於京都）	99.10.16
台湾視察・集会（於台北）	00. 6. 2～ 4
長岡集会	01. 7.13・14
浦安集会	02. 7.12・13
仙台集会	03. 6.28・29
小布施集会	04.11.13～14
長岡特別集会—中越支援集会（半年イベント）	05.04.23～24
長岡特別集会—中越支援集会（1年イベント）	05.10.22～23
長岡特別集会—中越支援集会（1年半イベント）	06.04.22～23

に参加し続けている。文献や画像、ネットの世界からは得られない、実際にまちで感じる感覚が、頭で考えただけの計画を修正していくのである。これからも自らの目で、感覚でまちを感じ、まちづくりについて考えてみる、そんな時間をもっていたと考えるのは筆者一人ではないだろう。

なお、ここでは約三十年間の集会について、後半に行われた地方集会からの紹介となったことをお詫びしたい。

■日本都市問題会議の連絡先

[事務局]

(財)日本開発構想研究所

〒105-0001

東京都港区虎ノ門1-16-4 アーバン虎ノ門ビル7階

TEL: 03-3504-1768 FAX: 03-3504-0752

と し だれ
都市は誰のものか——と し しゅたいしや
都市の主体者を問う

2007年2月15日 発行

編 者 にはんと し もんだいかいぎ
日本都市問題会議◎

発行者 小泉 定裕

発行所 株式会社 清文社

東京都千代田区神田司町2-8-4 (吹田屋ビル)

〒101-0048 電話03(5289)9931 FAX03(5289)9917

大阪府北区天神橋2丁目北2-6 (大和南森町ビル)

〒530-0041 電話06(6135)4050 FAX06(6135)4059

URL <http://www.skattsei.co.jp/>

■本書の内容に関する御質問はファクシミリ(03-5289-9887)をお願いします。

亜細亜印刷株式会社

■著作権法により無断複写複製は禁止されています。落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN978-4-433-37366-5 C0036

B60田村 2007.2